日语语法与修辞研究(二)

现代日语语法专题研究

聂中华 著

湖南人民出版社

日语语法与修辞研究(二)

现代日语语法专题研究

聂中华　著

湖南人民出版社

图书在版编目（CIP）数据

日语语法与修辞研究（二）／聂中华著—长沙：
湖南人民出版社，2005.11
ISBN7-5438-2500-7

Ⅰ.日... Ⅱ.聂... Ⅲ.①日语－语法－研究
②日语－修辞研究 Ⅳ.H364

中国版本图书馆CIP数据核字（2005）第133498号

责任编辑：聂双武

现代日语语法专题研究

聂中华 著

湖南人民出版社出版、发行
网址：http://www.hnppp.com
（长沙市荣盘东路3号 邮编：410005）
湖南省新华书店经销 湖南省航务管理局印刷厂印刷
2005年12月第1版第1次印刷
开本：787×1092 1/16 印张：24.25
字数：623,000
ISBN7-5438-2500-7
H.59 定价：40.00元

前　言

五年前笔者曾经和解放军外国语学院的李先瑞教授以“日语语法与修辞”为题，总结了各自的研究成果，在湖南人民出版社结集出版。五年过去了，语法与修辞的研究学术界出现了许多令人欣喜的研究成果。笔者这几年也有了一些新的想法，本来还没有打算出版，但笔者的友人解放军外国语学院教授、全国高校外语教学指导委员会委员许宗华先生劝说:“‘日语语法与修辞’是一个很大的课题，我们这一代人一辈子也不能做完，五年了，总得给同行一个交待。”。的确，这样一个课题，别说笔者一人，就是一代人、二代人也不可能做得很完美。因而，也就诚惶诚恐，把近五年的心得整理出版。让读者来评价。

语法研究在一般人看来是非常枯燥无味的事情。很多年轻人都不愿涉及这一领域。然而，语法研究又是必要的，日语教学中的问题需要从事语法研究的研究工作者做出回答。笔者十年来一直坚守这块阵地，从十年前初生牛犊不怕虎的豪情万丈，到今天视名利为过往云烟的心止如水的心境。与其说是年龄磨掉了心中的锐气，还不如说是长期专心从事研究让自己不在意其他事情。当然，十年中的酸甜苦辣，其个中滋味只有笔者自己知道，十年也是笔者成长的十年。十年中笔者得到了国内同行著名专家学者悉心指导和关照，著名语法学家北京大学博士生导师彭广陆教授、著名语言学家北京外国语大学博士生导师曹大峰教授，前中国日语教学研究会会长解放军外国语学院胡振平教授、上海外国语大学日本文化经济学院院长皮细庚教授等等一些知名前辈，在笔者遇到疑惑时，是他们热情解答，在笔者遇到困难时，是他们无私帮助。可以说，笔者的每一点进步，都是与他们关怀分不开的。也是在他们的鼓励下，笔者才一直坚持下来。

由于时间关系，修辞方面的心得来不及整理，因此，本书只包含了日语句法研究和日语词汇研究两方面的内容。日语句法研究部分主要系统地考察了日语复合句式的语法、语义特点，在书中借用了汉语的语法学理论对日语的复合句进行了新的解释。日语词汇部分主要选择了一部分词为题，系统地考察了他们的意义特点，及意义对语法表现的制约。也分析了一些词的日汉意义差别及对应关系，还涉及了一些词汇的文化意义研究。

与目前国内的日语出版物不同的是，本书全文用日语撰写，目的在于让有一定日语基础的学习者能更直接，确切地理解笔者的研究成果，也为了能与日本同行交流。考虑到书中有些例句比较难，笔者附上了中文译文。

本书的词汇部分第六章由浙江工商大学的王欣老师完成，王欣老师虽然年轻，但才思敏捷，学识过人。所完成的词汇部分有较高的学术水平。

笔者没有请名人写序，是因为笔者认为名人写序，多为溢美之词，书的价值应该让读者来评价。

最后，向在书中提到的各位先生以及没有提到的各位朋友表示感谢，在此也要感谢几乎为我付出全部的我的太太曾文雅和每天为我带来快乐的我的儿子聂子睿。他们是支撑我继续努力的全部力量，也是我全部的希望。

在此必须要提到的是湖南人民出版社，感谢他们十年来对我的支持。当十年前笔者还是无名小辈时，是他们的支持我出版了第一本书，在唯利益至上的今天，又是他们的支持才有本书的出版。

聂中华

2005 年 10 月于浙江工商大学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目　录

第一部　日本語の複文の研究

序　章
一、複文の定義について……(1)
二、複文の意味……(3)
第一章　因果関係の複文
一、因果関係の複文の表現……(7)
二、因果関係の複文の語義特徴……(16)
第二章　仮設関係の複文
一、仮設関係の複文の表現……(41)
二、仮定関係の複文の語義特徴……(70)
第三章　否定の仮定関係の複文
一、否定の仮定関係の複文の表現……(81)
二、否定仮定関係の複文の語義特徴……(83)
第四章　逆接関係の複文
一、逆接関係の複文の表現……(97)
二、逆接関係の複文の語義特徴……(98)
第五章　譲歩関係の複文
一、譲歩関係の複文の表現……(110)
二、譲歩関係の複文の語義特徴……(116)
三、分類の記述……(117)
第六章　付加関係の複文
一、付加関係の複文の表現……(120)
二、付加関係の複文の語義特徴……(125)
第七章　選択関係の複文
一、選択関係の複文の表現……(134)
二、選択関係の複文の語義特徴……(136)
第八章　並列関係の複文
一、並列関係の複文の表現……(142)
二、並列関係の複文の語義特徴……(155)
第九章　特殊の文の連接表現
一、特殊の文の連接表現……(168)

二、特殊の文の連接表現を形成する原因……(172)

第二部　日本語の語彙の研究

第一章　現代日本語の心理動詞
一、心理動詞の範囲……(183)
二、心理動詞の分類……(186)
三、心理動詞の構文特徴……(190)
第二章　因果関係の名詞修飾表現
一、相対事柄名詞類……(194)
二、感情名詞類……(196)
三、感官対象名詞類……(197)
四、表層変化名詞類……(198)
五、剰余名詞類……(199)
六、一般名詞類……(200)
第三章　日本語の接尾辞
一、接尾辞の分類と特徴……(203)
二、接尾辞の文法機能……(210)
三、接尾辞の意味特徴……(211)
第四章　日本語の動詞の「動態」と「静態」
一、動態と静態の定義……(212)
二、動態的な表現……(212)
三、静態的な表現……(216)
第五章　語彙の対照研究
一、中国語の「了」と日本語の「た」……(224)
二、“一边 A，一边 B。”と“A ながら、B。”……(228)
三、中国語の「过」と日本語の「過ぎる」……(232)
四、中国語の「才」と日本語「やっと」……(236)
第六章　現代日本語における呼称語
一、複雑な呼称語……(244)
二、呼称語の様々な表現方式……(249)
三、呼称語の特徴とその原因……(260)
四、呼称語と日本の人間関係……(274)
第七章　日本語の新語
一、新語の作り方の変化……(280)
二、新語の文化背景……(282)
補説一　日本語の文末のモダリティー……(284)

一、禁止・許可……（284）
二、勧誘・意志……（291）
三、命令……（305）
四、感嘆……（308）
五、勧め・忠告……（309）
六、断定・確信……（316）
補説二　類義の文末表現についての分析……(322)
参考文献……(363)

第一部　日本語の複文の研究

序　章

一、複文の定義について

(一) 日本学者の定義

日本語の複文の研究は日本語文法研究における重要課題の一つとして大きな関心が寄せられてきた。複文とは何であるか。日本の学者もいろいろな概念を作ったのである。代表的な見方は以下のようなものがある。

①複文とは複数の述語を中心とする複数のまとまりからなる文のことである。複文は単文の一部が拡大したものと見られる面もあるし、複数の節が結合したものと見られる面もある。

複文を構成する、述語を中心としたまとまりを節と呼ぶ。節は、複文の中心となる主節と主説に従属することで文の構成要素となる従属節に分かれる。複文は従属節のタイプの違いによって類型化できる。従属節は大きくは広義連用節(主節の述語または主節全体を修飾するもの)と広義連体節(名詞を修飾するもの)に分かれる。さらに、広義連用節は狭義連用節と並列節(主節に対して、意味的に対等に結び付けられたもの)に、広義連体節は狭義連体節と名詞節(修飾される名詞が形式化したもの)に区分される。(野田尚史等)

②「複文」は「単文」とは対立する文法概念である。「単文」とは単一の述語を中心にして組み立てられる文のことである。すなわち、述語を中心としたまとまりが二つ以上集まって構成された文のことである。

複文における述語を中心としたまとまりを「節」と呼ぶことにする。複文は複数の節が集まって一つの文を作り上げるものである。この「節」にはそれだけで文として独立できるものと、文の一部を構成するものがある。これらの節をそれぞれ「主節」、「従属節」と呼び分けることにする。日本語では、一般に主節は文の末尾に置かれ、従属節がそれに先行するという語順をとる。従属節を「名詞節」、「連体節」、「連用節」、「並列節」に分けることができる。(益岡隆志)

(二) 本研究の定義

先行研究の定義と違って、本研究では次のような定義を作ることとする。

複文とは二つか二つ以上の単文からなっているものである。単文の間に意味の関わりがあり、独立性が高い。つまり、どの単文でもほかの単文の成分として働きを果たすことができない。接続表現で単文を連接するというものである。

単文＋接続表現＋単文＝複文

接続表現の前の単文は従属節と呼ぶことにしよう。その単文は一つでもいいし、一つ以

上でもいい。接続表現の後の単文を主節と呼ぶことにしよう。接続表現が従属節と主節の意味関係を示すものである。

本研究の定義は先行研究と違ったところが以下のようである。

先行研究の定義は名詞節、連体節を含めたものである。本研究ではそれを複文として、扱うつもりはない。

次の例文を見てみよう。

①山田蕎が世話してくれた神田の大学近くの、下宿兼旅館といった格好の宿所に落ちついたのは七時半だった。（七点半钟，曾根才来到山田乔找好的住处。这里离神田一所大学很近，是座出租兼旅馆的建筑。）

②声をかけたのは席がなくて通路に立っている中年の洋服の男である。（搭话的是通道上一个没有座位的身穿西服的中年男子。）

上述の例文①連体節を含め、例文②は名詞節を含めたので、日本語の中で複文として、認められたのは普通である。が、本研究では複文として扱うつもりはない。本研究の複文は次の例文のようなものである。

③本書は中国で出版される日本現代詩のアンソロジーであるから、当然それは中国の読者に読み親しまれて受け入れられるものでなげればならない。（本书是在中国出版的日本现代诗的选集，当然必须是中国读者所喜闻乐见的。）

④「兼徳」の集金はすぐに済むはずだし、その足で、姉小路室町から向島へゆき、叔母を訪ねたとしても、ひと晩泊りぐらいで帰って来なければならない。（上“兼德”去收款，理该马上可以解决的。即使玉枝顺便从姊小路的室町往向岛看看姑母，留下住一宿的话，现在也应该回来了。）

ここまで分析すると、本研究では扱った複文は普通の「重文」と「合文」と大体一致であることが明らかにされた。

本研究の複文の概念に対する理解は次のようにするほうがいいと思う。

（1）複文とは二つか二つ以上の単文を含めなければならない。構成は次のようである。

単文＋接続表現＋単文（＋接続表現＋単文）

複文の「復」とは一つの文ではなく、二つか二つ以上の文を含むというものである。複文を分析すると、まず、単文を分別することができる。単文を分析すると、まず、分かるのは文の成分である。

次の二つの例文を比較してみよう。

③ところが、この玉枝の顔いろが、急に色艶を失い、どことなく病人相にみえるようになったのは、八月末のある一日からである。（但是，从八月底的某一天开始，玉枝的脸色忽然失去了光泽，总显出一副病恹恹的样子。）

④八千代も、病室の真ん中に立っているのは変な具合だったので、洋菓子の箱を持ったまま、曽根の立っている同じ窓際にいった。（八千代也觉得不便直挺挺地站在病房中间，便仍然提着糕点盒，走到曾根站立的窗口。）

例文③を分析すると、「……のは……からである。」という構成がある。それは主語と述語の関係であるので、単文である。例文④を分析すると、「八千代も、病室の真ん中に立っているのは変な具合だった」＋「ので」＋「洋菓子の箱を持ったまま、曽根の立っている同じ窓際にいった。」という構成があることが分かる。つまり、「単文＋接続表現＋単文」

の構成であるので、複文だと言える。

（2）複文も文であるので、文を統一するイントネーションを持たなければならない。文末には必ず、停止の符号がある。

次の例文を見てみよう。

⑤京の人形問屋の番頭と出来たのだということを正直にはなせば、喜助は許してくれるであろうか。（如果老老实实告诉喜助，她肚里的孩子是京都玩偶批发店的大管家的，喜助会原谅她吗？）

⑥一月のなかばだったら、わたし絶対に行きたいの。（假如是一月中旬，我一定去。）

⑦それはもしも面接試験でやられたら、一番困るところだね。（如果口试时遇到这样的问题，那就伤脑筋了。）

⑧どうせ洋服を新調するのなら、思い切って上等なものを作ってやろうと思う。（她想，既然做西服，就下决心做件高级的。）

上述の複文のイントネーションがそれぞれ違っている。例文⑤は疑問の複文であるので、上昇するイントネーションを取るはずである。例文⑥は強調のため、上昇するイントネーションを取るが、例文⑧は陳述のイントネーションをとるはずであると思う。

（3）複文を構成する文が独立性を持つがお互いに依存しなければならない。

独立性とは従属節でも主節でも文の性質を持っている。お互いに成分とすることがない。

相互依存とは従属節と主節は意味の繋がりがある。接続表現を通して、一つの文になっている。たとえば：

⑨「あら、まだ敗け惜しみ言っていらっしゃる！心配じゃあありません？そんな憎らしいことをおっしゃるなら、わたしの方も考えを変えるわ。」（“瞧瞧，还在赖帐！没慌？既然你说得这么气人，我也要重新考虑。”）

二、複文の意味

先行研究では単文の組み立ての研究に比べて、複文の組み立ての研究はあまり盛んに行われてきていない。特に、複文を構成する従属節と主節の間の関係に関する研究はまだに充分な成果を収めてはいないように思われる。（益岡隆志）

確かに益岡の言ったように、日本語の複文の研究は不十分である。今までの研究をまとめてみると、主に文法学の範囲での成果であるが、語義学、語用論、認知言語学の理論を利用して、研究した成果がめったにない。益岡は従属節の類型、従属節と文の概念レベル、従属節の従属度をめぐって、いろいろな考察をしたのであるが、ただ文法特徴を中心としただけである。が、解決しなかったものもある。たとえば：従属度という概念を提出したが、どのように定義するか答えなかったのである。

野田尚史は「複文と談話」という著書で大体同じ考察をした。複文の構造とか、単文と複文の連続性とか、複文を構成する節の種類とか、単文と複文とテキストの関係とか、つまり、談話の視点から複文を考察したのである。

日本語の複文の研究の成果が一番多いのは条件表現に関するものである。お大槻（１８９７）は伝統的な国文法研究の立場にあって、「ば」を原因―結果を表すのに用いる助詞として扱い、未定は未定に呼応し、既定は既定に呼応すると言ういわゆる「呼応論」を提唱した。それから、山田、松尾、松下、森重、阪倉、佐久間、三尾、蓮沼などの学者はいろいろな視点

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

から、日本語の条件表現を考察したのである。代表的な見方がいくつかある。

（1）国語研究所（１９５１）

「と」の用法

ａ、二つの動作、作用の時間的共存、先後の関係(同時に、または時間的に近接して行われる二つの動作、作用を結びつける場合)

イ) 同時(ある動作、作用が行われる。それと同時に、またはくびすを接して、別の動作、作用が行われる場合)

ロ) 継起(一つの動作、作用が次の動作、作用の前段階として先行する場合。この場合、両動作は同一の主体によって営まれている)

ｂ、因果関係を持つ二つの動作、作用を結びつける(前件について順説条件となる)

イ) きっかけ(一つの動作、作用が次の動作、作用のきっかけとなっている場合)

ロ) 習慣、反復的事象、既定の事実などにおける条件を表す

ハ) 順当な結果を伴う条件を仮定する

ｃ、次の発言の準備としての前置き

ｄ、起こり得べき場合を仮定し、その条件に拘束に後件が起こることを示す

「ば」の用法

ａ、未成立の事柄を成立したものとか停止、順当な結果に対する条件とする

(仮定の順説条件)

ｂ、前置き(立言の根拠や内容の前触れ)

ｃ、きっかけ．根拠、理由などとなる動作、作用を後件に対する条件として提示する

ｄ、ある条件が具われば、いつでもある順当な結果が生ずると言う場合の条件を示す(習慣、反覆的事象など)

「と」が「て」に置き換えられる条件

ａ、過去の出来事であること(すなわち既定条件)

ｂ、前件、後件とも、意志的動作であること

ｃ、前件と後件の主体が同じであること

「たら」が「ば」に置き換えられない条件

ａ、後件が命令であること

ｂ、前件が動作性の表現であること

ｃ、前件と後件の主体が同じであること

（2）山口（１９６９）

「ば」――恒常条件、一般条件などと呼ばれる表現に見られるような、条件の一般適非個別的傾向が強い。

「と」――単なる時間的関係から帰結に先行しているに過ぎない。

「なら」：判断に即した仮定

「たら」：事象そのものに即した仮定

（3）Aifonso（１９６６）

「と」――前傾が先行条件を表し、後件がその当然の結果、習慣的な結果、あるいは不可避的な結果を表す。

「たら」――後件で表される好意あるいは状況の前に終了あるいは完了している行為あ

るいは状況を提示する。

ａ、文末の動詞が過去形のとき

時間的に先行することを意味する。

ｂ、文末の動詞が現在形の時

条件的あるいは仮定的なことを意味する。

ｃ、文末の動詞が希望、意思などを表す時

時間的に先行することを意味する。

「ば」――前件が先行条件を表し、後件がその当然の結果、習慣的な結果、あるいは不可避な結果を表す。

「なら」――ある事柄が現在において真であること、またはあることがｒたが未来に実現するという仮定にも度ついて(過去の事実の言明以外の)さまざまな言明を表すのに使われる。

（４）言語学研究会（１９８６）

主節にどのような通達的なタイプの文が現れてくるか、ということで、条件表現を大きく二つの系列に分けている。

ａ、対象の論理に従いながら、二つの出来事の間の客観的な関係の描写に向けられるもの。

ｂ、話し手が自分の立場から、《私》の論理に従いながら、二つの出来事の間の関係を取り結んでいるもの。

ここまで考察すると、先行研究では複文の文法の特徴を中心としたのがわかるはずである。本研究では先行研究と違って、意味論の立場から、複文の語義関係の特徴等を明らかにしようとする。

(一)定義

語義関係と言うのは従属節で述べられた情報と現実の関係であるし、従属節と主節の語義のつながりでもある。

複文の分類は普通、従属節と主節の語義の繋がりによって、行われたのである。たとえば、因果関係、仮設関係、並列関係、付加関係、選択関係、逆接関係などがある。名づけられた名前は複文の全部の意味特徴を代表することができない。たとえば：因果関係の複文は「因果性」を持つのは当たりまえであるが、「条件性」も持っている。複文を分類する時、一つの特徴を基準にしなければならない。

(二)接続詞と複文

接続詞とは語と語、文節(句)と文節(句)、文と文との間にあって、それに先行する表現内容を受け、後続の表現内容に結びつける職能を有し、活用がなく、それ自身は実質的概念を持たないのに単独で文の成分となり得る語で、品詞の一つである。

日本語の複文は接続詞で連接されたものである。従属節と主節との語義関係が必ず接続詞で表示しなければならない。つまり、接続詞は従属節と主節との語義関係を示すことができる。たとえば：

①せっかく集めた少年、少女たちの半分は短期間でやめていくので、一人あたりの雇用コストは結果的に八十万円になるといわれている。(好容易才搜罗到的男女学生，约有一半人，在短期内就辞职离去。结果雇用一个学生竟花费了八十万日元。)(因果関係)

②食べることはからだの栄養になるだけでなく、心の栄養にもなります。(我们吃的东西不仅成为我们身体的营养,也会成为我们心的营养) (2005.8.03) (付加関係)

③工業地帯の季節ごとの風向きや風速、気象の変化を調べ、大気の拡散能力を測定し、公害を防ぐために必要な煙突の高さをはじきだし、使用する重油の成分を調整する。(调查工业地区各个季节的风向、风速和气象的变化,测定大气的扩散能力,防止公害所必需的烟囱高度,调整所用柴油的成分) (並列関係)

④これで反対を表明したり意向を固めたのは、朝日新聞社の調べでは計１６人、棄権が２人。野党議員が全員反対すれば、さらに１人の反対か２人の棄権・欠席で法案は否決される。(2005.8.07)(据朝日报社的调查,已经明确表示反对的有16人,弃权的有2人,如果在野党议员全部反对的话,再就只要1人反对,或2人弃权、缺席法案将被否决。)(仮設関係)

または、接続詞は従属節と主節との語義関係を強めることができる。前で述べたように、複文の語義関係はいくつかの可能性がある。人によって、理解が違うのである。話し手が接続詞で自分の表したいのを強調することができる。

次のような例文が見られる。

⑤このようにして設定れた「ソーシャル・ストラクチュア」は、その社会の複雑な諸現象を解明するばかりでなく、社会が内的な変化、そして(あるいは)外的な刺激を受けた場合、それに対応する仕方のありうるべき範囲(possib 上 e 「a 日 ge」を設定するのようなものであり、それは変化現象に対して理論的な説明、来たるべき変化現象に対する一定の予測存を行なう基盤ともなりうるのである。(使用“社会结构”这个概念,不但可以解释各种复杂的社会现象,还可以说明社会内部发生变革时或应付外部刺激时可能出现的范围(possible range),这个概念是对社会变革做出理论解释,对将要发生的变革进行某种预测的基础。)

⑥そうすれば、口は減るし、喧嘩の種は無くなるし、あるいは家庭が一層面白くやって行かれるかも知れない。(这样,既少了一张嘴,又免得为他斗嘴生气,说不定家里还可以过得和气些。)

⑦呼吸も、歩行も、内臓の蠕動も、毎日の時間割も、七日目ごとの日曜日も、四カ月ごとにくりかえされる学期末のテストも、彼を安心させるどころか、かえってあらたな反復にかりたてる結果になってしまうのだ。(呼吸、步行、内脏的蠕动、每天的时间分配、每七日一个礼拜天,每四个月重复一次的学期期末考试,谈不上使男人放心,反而成了新的反复逼迫的结果。)

⑧僕は友人の心からたのしそうな笑顔を見たいばかりに、一篇の小説、わざとしくじって、下手くそに書いて、尻餅ついて頭かきかき逃げて行く。(我只因为想看一下朋友由衷感觉高兴的笑容,才故意将一篇小说写糟,写得非常拙劣,还假装摔了个屁股蹲,一边搔着头一边溜走了。)

⑨いくら気がくしゃくしゃしていても、洋服を一度に五六着も作る程現実の経済的事情を忘れてはいないが、しかし、一着でも新しい洋服を注文したら、なるほどこの際、気持ちは幾らかでもさっぱりするかもしれないと八千代は思った。(即使再心如乱麻,八千代也不至于忘记自家并不允许一次做五、六件西服的现实经济状况。不过,如果新订做一件的话,心情也许真的会因此痛快一些。)

第一章　因果関係の複文

因果関係には前件が事実の場合がある。これが理由であるが、これには事柄の理由と判断の根拠がある。

基本的なものは、カラ、ノデ、タメニの三つである。カラとノデは使用範囲が広く、頻度も高いので、どう違うかということがよく問題にされる。そのほか、「から」を含む理由を表す表現がある。たとえば：からこそ、からといって、からには、以上は、上は、のだから、ものだから。また、「だけであって、だけに、もの、とあって」のようなものがある。

理由には「事柄の理由」と「判断の根拠」があるが、事柄の理由というのは動作や出来事が起こる(起こった)原因や理由にあたるものである。判断の根拠というのはある判断をする際に基となった事柄である。本文では因果関係の複文の表現と語用特徴について、考察しようと思う。

一、因果関係の複文の表現

(一) 基本的な表現

1. から

「から」はいちばん広く使われる。「から」は丁寧形にも普通形にも接続することができる。これは、言い換えると、この節の独立性が強く、独立した文に近い性質をもっているのである。

①ひどく小さい声で、相手は言った。自分も声を低くするから、曽根にも声を低くしてもらいたいといった表情だった。（对方声音低微。表情仿佛在说：既然我如此小声，请你也别再粗声大气好了。）

②「あれから毎日東京を方々歩き回ったんですが、その挙句の果に自動車にぶつかったんですから、どうもあまり名誉なこととは言えんです。東京の土を踏んだとたんに、少しどうかしてしまいました」（“那天下车以后，每天都在东京东游西转，到头来竟转到车身上去了，实在有失体面。一踏进东京大门，就有点不知所措。”）

否定や過去の形にも接続できる。

③清は十何年居たうちが人手に渡るのを大に残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかった。（住了十多年的房屋，一旦落入别人手里，阿清感到非常难受。但终究不是自己的财产，她也没有办法。）

④人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。（胡萝卜芽儿尚未出齐的地方，苫着一层稻草。我们三个在上面摔跤，玩了老半天。）

複合述語の類にもかなり自由に接続できるが、意志・依頼・命令などには、そもそも意

味的に付かない。

「から」の表す意味は、大きく二つに分けられます。

（1）理由

「Aから、B。」という表現は、話し手がBの理由としてAをあげるという意味を示すのである。次の例文の「から」は理由を表すのである。

①あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。（我火冒三丈，将手中握着的“飞车”冲着他眉宇扔过去，）

②手紙をかいてしまったら、いい心持になって眠気がさしたから、最前の様に座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。（写完信，心情舒畅，睡意朦胧，又像刚才那样，在房间正中放松筋骨躺成个“大”字。这回没有做梦，睡得很香。）

理由節を含む文は「～のだ」が主節に出やすくなる。それは、理由節というのは、主節の内容が文脈ですでに明らかになっていて、その理由を説明するということが多いからである。

③おれはこの時気がついて見たら、両手で自分の袂を握ってる。追っかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。（这时，我才觉得自己捏着两只袖口，追逐时，生怕袖子里的鸡蛋滚来滚去，两手才这样攥紧的。）

（2）判断の根拠

例えば、次のような例で、「理由」を表すと考えると、少し変であるだろう。

①卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出掛けて行ったら、四国辺のある中学校で数学の教師がいる。（毕业后第八天，校长派人来叫我，我想大概有要紧的事。到那里一看，原来四国地方的一所中学需要数学教师。）

「四国辺のある中学校で数学の教師がいる」は「校長が呼びに来た」理由と言えるだろうか。

この場合の「から」は、「校長が呼びに来た」と判断するのに、「四国辺のある中学校で数学の教師がいる」ことが材料(根拠)となったことを表します。

（3）その他

「～から」には理由・根拠を表すとは言えない例が意外に多くあるが、ふだんは意識することなく使っているのである。が、はっきり説明することができないのである。

①「ええ、古い日記を見るのは楽しみですわ。なんでも隠さずその通りに書いてあるから、ひとりで読んでいても恥かしいわ。」（“嗯，看看从前的日记，不失为一种乐趣。什么也不隐瞒，照实写下来，有时看了连自己都会脸红。”）

「隠さずその通りに書いてある」のは「恥かしい」理由にはなれない。「隠さずその通りに書いてある」から「忘れない」だろう。

もっと説明しにくい例もある。

②月末までに必ず返すから、1万円貸してもらえないか。（月底前还你，能借我一万日元吗。）

「お願いだから、～」というのもよくある言い方です。

この「理由と言えないカラ」の例は、主節が依頼・命令・勧誘などの、聞き手への働きかけを意味するムードを持つことが特徴である。依頼などの「理由」ではないのであるが、その依頼などを成り立たせる状況を示している。

2．のだから

「～から」の前の述語が「～のだ」の形をとると、「～のだから」となる。話しことばでは「～んだから」ともなる。

Aを事実として認め、それを理由としてBの主張を述べる。

Bは単に事実を述べる文ではなく、話し手の気持ちを表す文になる。命令・依頼・勧めなどのムードや、評価を示す表現などが来る。「こんなに」、「せっかく」などの副詞的表現が一緒によく使われる。

①読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞ仕舞まで読んでくれ。（也许您很难看清，但我已是拼了命写的了，请您把它看完吧……）

②翁人形一対が、当時二円の値段がついて京の店に出たのだから、越前竹人形は、高級人形の部類に入ったといえよう。（一对竹偶老翁，当时在京都的商店里售价两圆，可见越前竹偶是属于高级玩偶的范畴了。）

3．ので

ノデは普通客観的な原因を表す。詳しく言えば：次のような用法がある。

（1） 社会の現象に対する記述

①しかし、政府には小学校設立に補助金を出すだけの余裕がなかったので、大部分国民の負担で小学校をつくっていった。（但是，政府连支付设立小学的补助金的余力都没有，因此，大部分的小学是由国民出资兴办的。）

②しかも、こうした商人の台頭はそれまでの社会体制をゆるがせていたので、十九世紀初めに武士たちは真剣に社会の改造を考えていた。（而且如上所述，这些商人势力的增强动摇了以前的社会制度，因此到了十九世纪初期，武士们才认真地考虑社会改革问题。）

（2） 自然、物理的な現象に対する記述

①爆撃によって高い建物がなくなったので、首相官邸のある小高い丘からは、はるか向こうの東京湾を見渡すことができた。（高层建筑已被轰炸得片瓦无存，站在首相官邸的高岗上可以远望东京湾。）

②「阿賀野川水銀中毒事件」――新潟県を流れる阿賀野川下流の住民が、上流の昭和電工度瀬工場が流したメチル水銀で被害を受けた。熊本水俣病と同じ病気なので、新潟水俣病事件ともいわれる。（“阿贺野川汞中毒事件”――流经新潟县的阿贺野川下游的居民，因上游的昭和电工鹿濑工厂排放的甲基汞而使身体健康受到了损害。由于病症与熊本水俣病相同，所以又被称为“新潟水俣病事件”。）

（3） 感情、感覚などの心理状態に対する描写

①そうして迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないと云いました。（自己不知如何从窘境中脱身，因此只好向我求助公正的见解。）

②赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍った。（红衬衫刚刚坐下，豪猪就霍然站了起来。我很高兴，不由地巴嗒巴嗒拍了几下手。）

（4）身体の現象に対する客観描写

①玉枝は下腹の鈍痛が次第にひどくなりはじめたので、京都駅に下りた時、待合室のベンチにすわってしばらく痛みをこらえていた。（玉枝在京都站下电车时，由于小肚子已不

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com